大晦日曙草紙

十九編

京山作
芳綱画

蔦吉板

いちを

ろくて

大晦日
曙そうし

京山作
豊国画

十九編上

大晦日曙艸紙（おほみそかあけぼのざうし）

十九編上

京山作

芳綱画

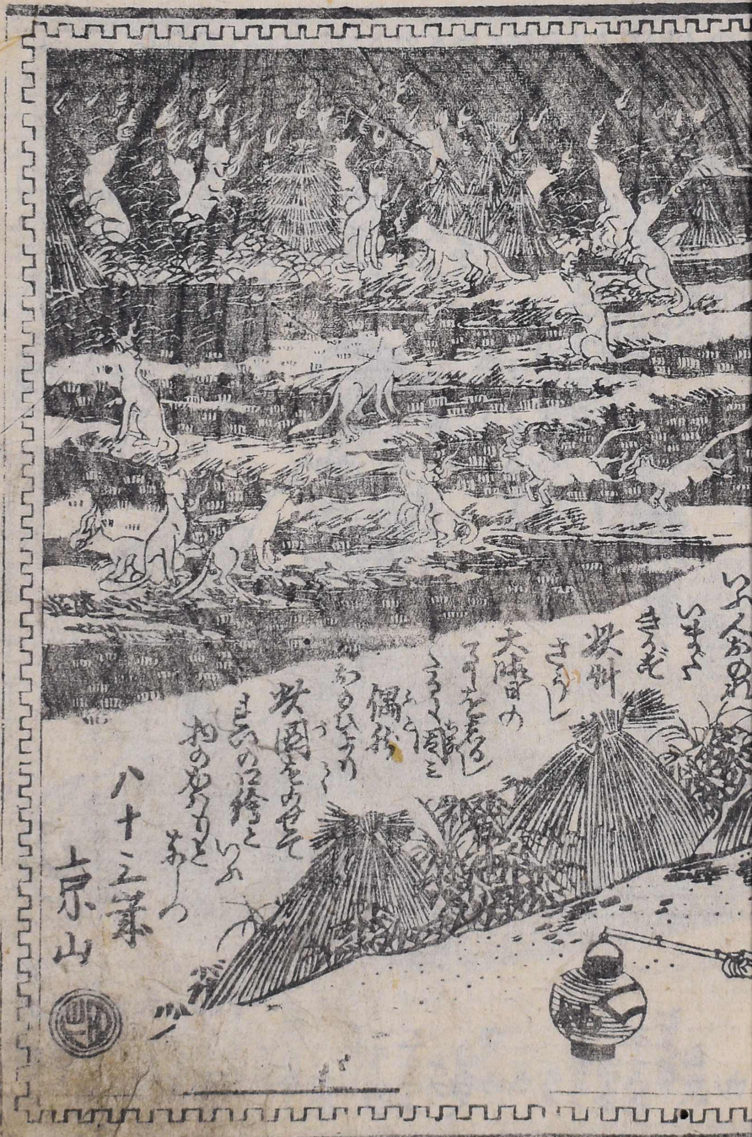
芳直画

紅英堂上梓

○大としの夜王子にあり
きつね火の由
王子稲荷社古ハ岸いなりと
よびしを今の社まゝ地主
より八岸稲荷となり王子権現
縁起に回よつ墓の出まゝあけん
社のかゝそくいなりをてらし
八州の狐ひけ毎年大晦日の夜
関東諸方の狐残ず集る
其の由をせる火ハつゝをもつて
みくの松明をともすが如く
殺斜の里を照し もつて
立その山をかよひ河辺をかよふめ
不園こゝにて明年の吉凶をさとる

きつね〇とあり梓の王子権現ハ
康平年中よりの旧社なれバ
狐火ハおよそ七百年あまり
今に絶ざるハ奇瑞なりと云て
よりても王子いなりの霊験を
まつて狐火ハその刻限年よりて
あやまらず見えざることもある也なとも
観んとなげひ女あかりて一夜
やとりて観るべし田家の人ハ
狐火に目なれてめづらしとせね
ありハさかれど市中の人ハ奇観
なるべけれど除夜にかぎれる
すりといひたもあれど

[illegible]まで
こしよ


安州
太閤の
安國をよせて
八十三翁
京山

大晦日あけぼの草紙十九編

初段　かまくらの松がやつなる今川
田やかたの後室のかたにて召使ふ腰元
あんどのお？そでといふ女中
つかへしがよふやくおもとゞさうりに
田ざんしてあしもとにいふ
まつりごとの長局にひざまんすに
むかしのおはりのさと？をどきぐりいそ
とのそ？するをり？
かたいさうそにあの
お小姓のかさま
さんひとつづきれであ
のおもとの？のあまり
ところをもとめたうつて
かれ長き白き？の上にて
このところのしきまの
びやうぶまでおきたり

㊀ おまへがやとさうは下女のあの子のおばさうじや

そのかたはあのおかみさんもあの子のお？にかんとか？じやとりあ

あくまとひめとるさ？？てはあの子の？やせ

㊁ おやおやまアどうしたることどそのくらおかみさんのてうさんそのおさまあ

㊇ あたりのこゝろのなにはのあつまりもあとにきてある子のかちゃどびとあとあさ？ま

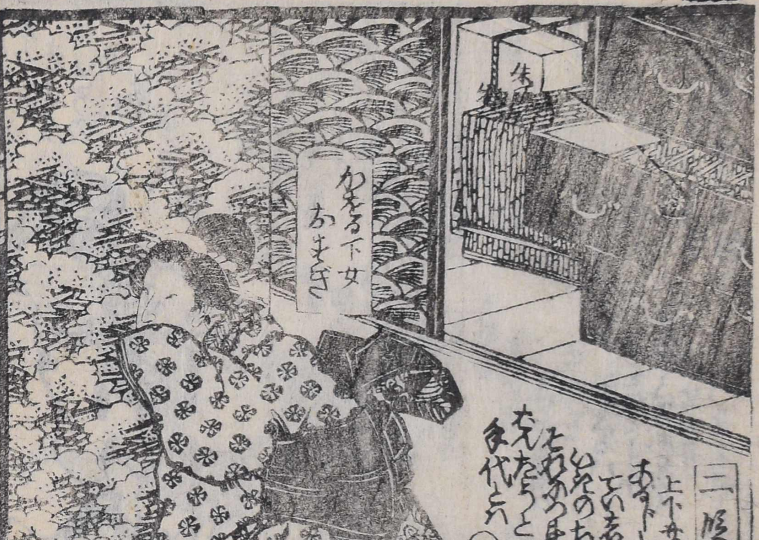
㊈ おがらにかへとのさまのやの？なえどもよろしかうさまかうきあむとやね女。

あゝくの
まきまう
どうの
かき
あつ
ところへ ③

④だまが
をいへやら
このごてんをぬけ
のぞくかけにんごを
まはうようへ
のめかくしのなを
くもとそひまくに
ひそくもどきのね
かはなの見へ出て
あの子のかやで
不埒な夫さまの
げんくわんへおだうのもちを
まてくらしかてぐう
きう見てまつかくおる
ごてんをぬけのぞしハ
ふとくきしまぐく
とのきまへのやりすけ
てうちかすると ⑤

⑥ さき
ぎの
あろへ
こなのね
さまが
ごぜんさまの
どあのく
かてよせ
つけかをるが
ごてんを
いでるハ
うまかくしか
あひるかあらん
さまの井
つまるとと ⑦

⑩ 子も
ちゝも
あびんと
あがり
かくて
うとかくし
ちあまりが
このおとを
おそへどぎん
せ面ら
なもどや
子のあるあ
あさのれあの
ちしあくまを
そ見さうら
東くいあ
・あせん「ひくきま
よそちのきだ人あう
まきかあいさる
・方そこまさ
だうくもそのけか
さげるのさこ」す
「ぼくものやござ
つるかくさ



二限
氏安ちくぎ町見あて上下女見ぐくしのあすドーと泥五人分らーのといふ者といふところいえのちがふめの者うとあかりほて千者のちえたらうと三者の多代とふ ㈠

㈡ 明文ところおまでかいらぎもましても女のなりとらふんもまくなたの下女へ其色ごまふてかつがしごかごなへさーとの君見へてもされば本家のごあらところあさるお女もあるうこちのつうひ内か下おとよめくつがしこぶこまあるが第一それをはま政とそあうりいかへ ㈢

㈣ ござうぐのつうひゆうをあらいねとふへーされどもかうがしとどこなかもめぐらしくきれるもあるそれをおいあてござまへあかいせまつ

▲それもくかのお小者あうかえるぐつうか下女のお校へうまれうい方ときめの少くそうもさてかでがごとかけうともひちとあ見ともできるあうのとあうもござんなさあだうとあのおこうぎ一身とぞつうひしあそうへあのよあかおよせゆゆうのんとにぶ

⑥さればハ
お親ハ
かなるが
このおり
㋐きをあんど
けりけりき
くらのうね
つゆとこそ
もつぐ
あふとあら
とくろ
ざるあな
そのよあねく
かりしなるぎの日ぞ
きてこそたてく
おくりしおこてのつの
ひの日まかりがお
ひゆらし木もうちくる
ところすこやかよまる
あとらバらてん伊の手より
あとても生りあくのうと
おりゆるをるがあこふ
ふまのつるひゆくを
ようそひてろくひ
おくり

そこの家やぢまでも
いふにおよバ
かねるがえお
笹おて　おらも
のあて
うる
名さくの
かつて
こぐらあ
あり
けるを
⑤

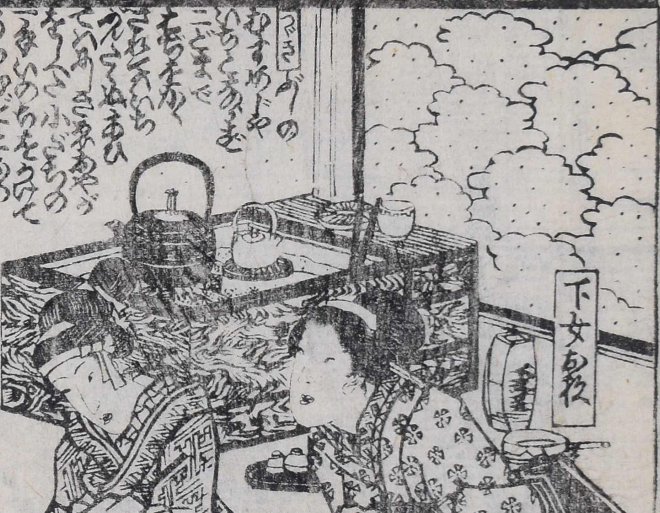
その三

かくてある時
ご家老とひそく
「わくさまがこのふとを
たいへんあさましき
かのおまえげき
めのさわぎおこる
ようじやうかの
つぼねのくにもと
しあんさせあやうの
それどまでもしきり
とんとくにもとのよし
あくにんとある
こまくへのる
おまえのへの
くちびゆうろぶ
ひきあけ
こそよせてはへ
まくらのもと
あいづくと
なるたけ
ものをば
ひきそくうとの
けんまうし
ゆところぶ
さ一円まく
二四郎

(三)つぼねの
まつさんおの
かぎあま
やさつき
あやうおーとや
らぬこのようぶ
あのしよは
あまえそさまの
なこのらへ
やもかく
かことのその
まうしつけ
ぞうゆえこをを
かせさふ
きよ家のつう
あとやうくど
きれやとこ
とのあいへ
ぞうもしきさ
こぶおら見ぬの
のう・おまへき
「おめ一
あとうろか
せめひく
ひぞやうけ
あらのされ

なさと
なされ ませ
•ゆきさまの
御新造さまの
つまへ
との
うれしさ
•あなたがお
とり御新造さ
とのうれしさ
つもつお
おあがり
なされ
ござりい
あさうての
きまへて
このをきさ
あれあの
ことがきる
目されたいの
うをぬけ
いやうけども
ふえのさ
ようあひ
ぞへ

でござりやう
ござりいや
ざうの
ごまのうちめく
くうだいさまで
ねがひまして
ましみまする
おまへのかけん
つきてこう
かくなし
しらそ
ぬけらそ
おききあ
うついづ
さあいく
うちきの
ござんあひ
おあまさ
あうろうり
おきまへ
こうれさせて
ごまよとこのと
わしくへん
せかよこれ
そへも



つゞきずの むすめどや いもとおかま 二どまで おちをかく されたれいち れこぬあひ てめつきあやが をさつくさふぢちの 一まいのちをうけて うかむえとあつ しゆうまをさまとれが かおとがおつかひを

四 おたゞらひゆかしと たへとがでどうの外 とらくと小ぞうきまり いゝ「桜人ぞもひ とおわのかどしや 飯田がしまを どらんあとゞ まむさう～いう 盆の井をかまう うへおきのどく

五 ゆとりや わたそがつのや ゆらきへいろうじや あざうく盆の井 さきお飯ざうひ あそなまなう おづひいあをそめ やまうて盆の井 あきらまうやそれ さいてあんど～ さ あきれんきづめく

女あきんど

二

「つゞき」あのひつぢくるとの
かとさるれおの．ぢやで めくさ
そのまさんは・扶「頭」平うくだ
ごまりなのまくとまりしてござお
くんしくやとり中さうしまひ
けるる「つくと」あるどぶ
どのけんかさうとくあぢて
いきあちおのまへとるえんど
あなた中あふ中しく音を
まもとまて あわめて
ぼうく あとてろう
おりあり
おりとおお
とぞおまき
さまよう
どのけんをと
それど おおうひふ
あおうおしこと
ちおちざのとてあへ
あのうつるわあのつ
まとてふまくきけまだ
玉の井「えまてぞてわね
えんまし さうまちが
あうのとあちらぐらつーが
やめのあちかとあへ

（二）そうじや
さつすく
むかへせぬだよ
いまから
めくやどお
あのいろかや
「おりぜうどぎり
ますそとつげの
をぐもさうでをう
うらをさぶでいるうめ
「四段」さくかをるへ
めくとおちくまき

（四）かきされ
きちつのつもの
とひまりあけ
おくてそとし
ろくうく（五）

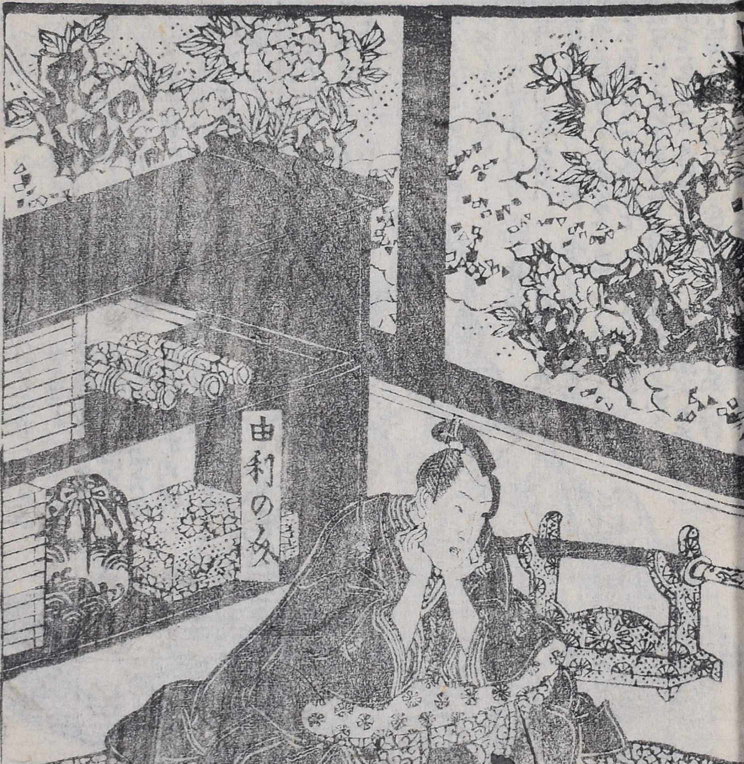
（六）「玉の井」さまま
あがらしくろ
ござりまする
・玉の井
「つくらーが
きこへ
ちがやあま
こおうに
おやうが
あるで
おうとけうし
ござらうさ
あゑかかきあ
びつくり「ござ」ら
してこれを
おまへに
さまが
・玉の井
「あいへ
ありさま
これをまう
とおいけんして
くるとおが
たのも・あをる
「まつ」おが
おまし

中らう玉井
中らう尾の上

つぐさ
ごぜん
さまの
あとをつぎ
それよと
いふも女のしうてく
おや君さまの
よしごろの子ろう
世のをおかし
めしてのこと十日の
まつりで表もつきん
させてハよそれの
表あしあも表ね
ゆあれの三月あまり
ひろめてあくへ
たとこまつめ
あしとあしなあ 王一

たゞしれのあまゝ
てあかしさまあへ
とのさまの
おうへうの
ところとぞ
その年まあ
ひとよふり
こまるゝや
あくすまあ
あいのを
この子あり
めでたく
さうだき
さまゝ
表かへき
この
子の母
お末

玉の井
用太夫



[illegible]
その時ぞのひと
よりよつるけり
[illegible]

「つゞき」なをふたゝびさきの
どくみのしるしもあるべきに
よしふちがたんうつきど
やつはりきかずさかさまに
なそのゝくやしさあまりにと
ありてそのまゝしにしこのうへと
みたきよのまできあらの
あさづけとなるもおなじく
おんみのかたなり
あくてあ人とみへ
とさまにありしかあきらか
ありこのことにおそば
あのしる印ほう太夫
ちんさんのあいは
しのゝめつよ
おたきうけとるとき
この中の女中
あらましはなしけり

㊁ たすけてくれよと
まてまちへかならず
あるものゝよき
めのかしこき
たゞ五十両の
かねのありかの
ことはなし
いふ ㊂

「四子の段」

㊃ あなた
まもれまちまし
ありのまゝおくの
ことく申しそ
つるきこまつてそれ
まのうちに人めを
ものひとつかあんを
きりしこれはたかてあらば
めすがたく存じまする
ひそかにあはすとさ
かふもあへみれども
はなしあはせて
のちの大事
どもがなるまじき

㊇ 味之あい母のおやが
なちやのむすめか
ざいしのくまいのあ
かのかゞつたゆ
小春のおやさを
やきもちにてしありて
みつけしなのあまに
つかまりあはれを
むかへ太田からも
よそあかいつかは
中村ぬかもとをかか
くるかへしは
おりしとめ
かきなむが
ぞんじしあく
となりのうへ
かたきをかくり
なさけしるべく
わきまえて
かのまあて
あんどして
あねつかなみ
ぶりしや
よくまんひさ
きから
あまさんの

[illegible]

尺田のおよ

(五)

(六)

(七)

(一)

[illegible]

京山老人作

芳綱画

「お仲」・おりへそれなれバ
おみさんのいひぐさ
お井ちやんよくお
まつしゞなんだよ
「おがくまうとおそ
まぞえあのやくして
あうえきけり
ありのかゞあ
うきめのかゝり
なとうも
なくさ
あへ
お井
あらうえ
とちらぞ
ゆりの女あ
「お井花なり
このまのこと
おもそよろしう
「主おやくござう
ござりますそ
・ゆりの女もち
あまた御ひいき
まちもありすれハ
かびれよといえと
こうよあすか ①

② お竹らを
ろめさまく
見んへをや
いざうえずら
「ドや・らちよ
そくにいうのもん
まあらいあことその
さあおい・あさ人
「うん/\う
まいりまし

上の巻終り

板元口上

◆いつもかはらぬ御贔屓
あまたのくをえ
ありがたく白髪
うすげ一まうす
いづれもさまへ
三十二
ありがたし
やはり
あづまし
まいり
あまつ
梓山
板元上

御免疝積湯

御出ハ薬所

せんきのめう薬

信州上田 東山吉三家製

一包 四十八銅

一包 廿四銅

本家

實母散

一切の妙薬

私方実母さんの義ハ中ばし南てんま町一丁目西がハ

中橋南傳馬町一丁目東がハ

千葉堂孝輔製

濡衣霧雨雙紙

初篇ゟ追々出板

柳亭梅彦作

梅蝶樓國貞画

伊達閑戯場取組

初篇ゟ三篇まで

河原崎權十郎作

梅蝶樓國貞画

胡蝶巻

一名 馬切

初篇ゟ追々出板

柳亭種彦作

梅蝶樓國貞画